

森づくり構想における市民ワークショップの 参加者にもたらす効果についての分析

石原 洋平¹・盛岡 通²・藤田 壮³・今堀 洋子⁴

¹大阪大学大学院生 工学研究科 (〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-1)

²正会員 工博 大阪大学大学院教授 工学研究科 (〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-1)

³正会員 エ(博) 東洋大学教授 工学部 (〒350-8585埼玉県川越市鯨井2100)

⁴正会員 工学 NPO法人 イ・キューブ (〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-1)

近年、まちづくりにおける新しい市民参加の形態としてワークショップ(以下、WS)が注目されている。本研究では環境保全のまちづくり計画の事例として尼崎21世紀の森構想(以下、森構想)を取り上げ、その中での市民ワークショップ(以下、市民WS)に着目した。WSに関する先行研究、文献調査をふまえた上で、市民WSにおいて実施された自由記述式アンケートのテキスト分析を行い、回答者全体および参加者属性性別の「地域の学習」「合意形成」「市民の主体的活動」についての項目の時系列変化を見た。その分析結果と市民WSの運営内容とを照らし合わせることによって、市民WSの成果を明らかにした。市民の思いと行政の計画進捗とのバランスを考慮することを今後の課題として挙げる。

Key Words : workshop, citizen participation, Re-forestation Plan

1. はじめに

近年、地域住民が参加するまちづくりの重要性が強調されており、さらにはパブリック・コメント制度の導入などにも見られるように、市民が政策形成のプロセスに参画することが意思決定の必要条件であるともされる。地域住民や関係する市民の意見を反映して都市計画や環境づくりを進める市民参加の形態としてワークショップ(以下、WS)が注目されている。WSは、行政や市民、事業者といった関係主体が対等な立場で参加する会議の機会であり、適切な方針の下で運営されることにより参加主体は創造的かつ主体的な合意形成を図ることができる¹⁾。

一方で、WSが運営されている現状は多様である。計画や事業に関連する主体間で地域に対する具体的な提案を市民参加で作成するケースや、広く市民に情報や知識を提供して関心を向上させるケースなどWS運営の目的は多様であり、目的に応じたWSの計画と運営、フォローアップのシステムを構築することは課題として残されている。

本研究では、WSを通じての市民のキャパシティビルディングや地域組織の発展、および対象とする都市環境の認識を明確化するプロセスに注目してWSを企

画運営してのその効果の考察を行った。兵庫県尼崎市における臨海工業地域を再生する森づくり構想の市民ワークショップを取り扱った。

2. ワークショップ研究の分類と 本研究の目的

(1) ワークショップの性質

WSは市民の主体的活動への参画から始まり、WSの場において対象とする地域や環境について活動の意義や方法を体験をもとに学習していくことに展開する。その上で参加者グループの中で計画策定についての合意形成を行う機能が期待されることである。3つの要素が相互に関連しながら、もう一段上の合意形成へのステージに進展して、その過程で新たな参加者が加わり、WSの活動の輪が広がっていく構造が想定される。(図-1)

(2) ワークショップの運営に関する先行研究

WSに関する先行研究を分析の方法に着目して、12の事例について表-1に整理した。先行研究の分析の手法にはアンケート、ヒアリング調査によるものが多

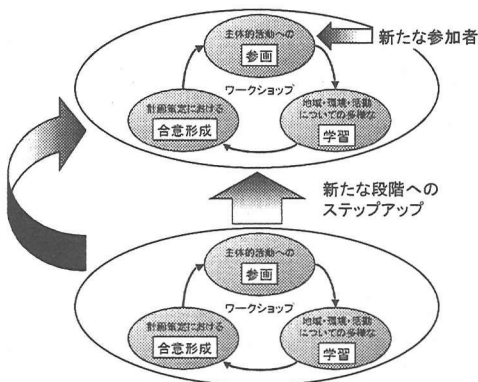


図-1 ワークショップの発展のイメージ

く、参加者の意識変容や WS のアクティビティ、ツールの効果について考察したものが見られる。

計画策定プロセスにおける WS の効果としては、① 集団の中でのコミュニケーションを通じて参加主体の対象に対する理解・知識が増加し、結果として意識が変容すること、②多様な主体間の合意形成が図れること、がある¹⁴⁾。これらの効果を意識した上で、計画に関する学習と計画提案の合意形成の2軸上に先行研究で取り上げられた事例を位置付けた。学習の軸に関しては、WS では「体験」を重視することから、計画対象の情報を提供しただけか、現地調査を行ったか、あるいは現地での活動が中心であるかを基に3段階で位置付けた。合意形成の軸に関しては、グループ提案づくりのアクティビティ数がプログラム全体のアクティビティ数に占める割合を基に位置付けた。

これらの研究対象であるワークショップを参加者間での合意形成の機能と、対象についての学習の機能の2軸で図-2のように分類した。ここでは、体験重視型WS、合意形成重視型WS、情報共有型WS、学習・合意形成総合型WSに分類され、事例によって幅広いプログラムを実行している。尼崎の森市民ワークショップを企画するにあたり、参加者選定の透明性を前提としたことにより、メンバー間で知識と意欲が多様であると予想されたことから、情報共有型WSとしての要素から始めて、ファシリテータの判断で参加者の状況を見つつ、特に継続的な森づくり行動への参加の合意を形成することを企画した。

(3) 自由記述式アンケートの分析に関する研究

WSでの参加者の変化を行動観察するとともに、自由記述式のアンケート調査から客観的に判定するために、本研究では、筆者ら^{15), 16)}がWSに関する研究で

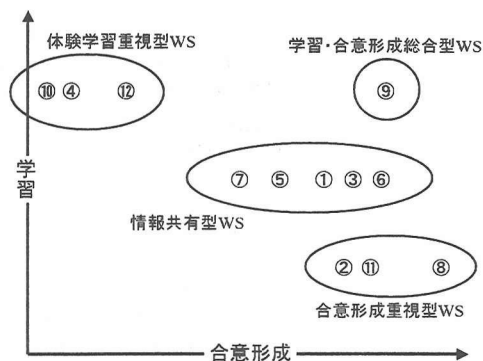


図-2 ワークショップ事例の効果に関する類型

行った、以下のような自由記述式アンケートの分析を発展させて採用した。

- ・ 自由記入法のテキストから参加者の意識を読み取るためのテキスト分析を行なう。
- ・ 2つの意識変容プロセスの各要素に関してキーワードを設定し、参加者が毎回記入するアンケートシートのセンテンス数を時系列に追うことでモデルの検証を試みる。
- ・ 各要素に関して複数のキーワードを設定し、キーワードを含むセンテンス数の変化を見る。

自由記述式アンケートは、回答者の立場として一般の選択肢式アンケートに比べると答えにくいという欠点がある。また、調査の実施者の立場としても得られたデータを解析するのに時間と手間がかかる。しかし、回答者の思うがままの自由な回答が得られるため、思いもかけなかったような内容の回答が得られることもあるという利点がある¹⁷⁾。

(4) 本研究の目的

本研究では、環境保全のまちづくり計画の事例として兵庫県尼崎市の21世紀の森構想の計画策定や活動参加の市民グループとしてのキャパシティを向上して、その組織力を高めるとともに、広く構想に対する市民の認知と理解を得ることを目的として企画、運営を行ったワークショップを対象としている。ワークショップはWWF(国際野生動物基金)の支援を受けて、環境活動NPO法人イ・キューブが主体となり運営された。

本論文では市民WSの中で実施された自由記述式アンケートの集計結果を時系列で分析してその属性別の意識の変化について考察したうえで、市民WSを含む地域の環境形成へ市民が参加して運営に携わるプロセスについて検討した。

表-1 WSに関する先行研究のまとめ

①	澤田俊明, 森下善博, 山中英生, 久米将夫 ／屋外生活空間整備におけるワークショップ手法の適用性に関する一分析 ²⁾	研究の目的	WSの実例を通して、その特徴と問題点を明らかにし改善の方向を探る。
		分析の手法	WSの企画・運営に参画し、WSの内容と運営の観察、公園利用状況の観察、WS参加者へのアンケート及びヒアリングを行った。
		分析の論点	WS手法自体の持つ課題や改善点の一面を明らかにし、WS手法が屋外生活空間の整備システムとして取り入れられる場合の課題等について考察した。
②	金俊豪, 藤本信義, 三橋伸夫 ／山村集落のアイデンティティ形成におけるワークショップの影響に関する考察 ³⁾	研究の目的	地域の認識と地域の将来像に関わる方向性設定からなる地域アイデンティティの側面からWSの影響を考察する。
		分析の手法	栃木県栗山村（9地区）の住民個人（18～70歳）を対象に匿名アンケート調査を行った。
		分析の論点	WSを行った地区と行わなかった地区とで地域の認識と地域の将来像に関する方向性設定を比較した。
③	盛岡通, 藤田壮, 佐々木暁一, 南詠子 ／環境ワークショップにおける参加主体意識とデザインに関する調査研究 ⁴⁾	研究の目的	参加者の意識の変容過程を検証するとともに、環境WSでの技法の効果を明らかにし、そのデザインの指針を得る。
		分析の手法	WS各回の終了時に参加者が共通項目について自由記入した「ふりかえりシート」のテキスト分析を行った。
		分析の論点	協働・環境意識変容モデルのキーワードを設定し、それらを含むセンテンス数の時系列変化を見た。
④	森野美徳, 西岡誠治 ／住民参加のまちづくりの効果的な展開に関する考察 ⁵⁾	研究の目的	「安全・安心まちづくり女性フォーラム」で実施された行事の評価から全体を総括する。
		分析の手法	各地の実施主体から寄せられた①主体、②企画内容、③経費、④地域のデータを用いた。
		分析の論点	行事を類型化し、①経費効率、②社会への訴求力、③継続・発展性、④企画のユニークさの指標のもとで評価・分析した。
⑤	内田奈芳美, 真野洋介, 志村英明, 佐藤滋 ／目標空間イメージの共有を目指した連続ワークショップの手法に関する研究 ⁶⁾	研究の目的	WSにおける効果的なツールの組み合わせ方を明らかにする。
		分析の手法	WS実施者にヒアリング調査を行うなどしてWSの手法を改良していった。
		分析の論点	各WSとツールの役割を「目標空間イメージ形成・共有段階」と「思考・作業プロセス」の2軸マトリックス上に位置付けた。
⑥	清野聡子, 宇多高明, 花田一之, 五味久昭, 石川仁憲, 太田慶生 ／住民合意に基づいた海岸事業の進め方に関する研究 ⁷⁾	研究の目的	住民合意に基づく海岸事業例の概要と特徴を実践的意味から明らかにし、課題の整理と今後の展望を行う。
		分析の手法	海岸事業についての住民合意を得るための懇話会を計画・運営し、その記録から体系的なまとめを行った。
		分析の論点	地先海岸への住民の意識、国庫補助を受けて建設された公共施設の撤去条件、懇話会方式の要約、地域住民の意見を汲み取る手法について考察した。
⑦	坂野容子, 饗庭伸, 佐藤滋 ／既成市街地のまちづくりにおいて住民参加ワークショップの果たす役割に関する一考察 ⁸⁾	研究の目的	WSが住民の「問題・役割意識の形成」にどのような役割を果たしたかを分析する。
		分析の手法	参加者の問題意識、役割意識、具体的に担った役割をヒアリングした。
		分析の論点	WS前中後と各項目の時系列の変化を見て、まちづくりにおけるWS、WSにおける問題・役割意識の位置付けについて考察した。
⑧	錦澤滋雄, 米野史健, 原科幸彦 ／まちづくりワークショップの合意形成機能に関する研究 ⁹⁾	研究の目的	都市マス策定過程においてWSが果たし得る機能や問題点を明らかにする。
		分析の手法	WSの場で使われた諸資料、WSの成果物、「瓦版」等の報告書を用い、さらに行政・住民・専門家に対して事実関係の確認を行った。
		分析の論点	作業、会合、プログラム全体に着目し、合意形成A：対立解消、B：要点抽出、C：要点選択がどのように成されたかを整理した。
⑨	村田義郎, 延藤安弘 ／参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察 ¹⁰⁾	研究の目的	住民参加の意味や意義、また、WSを用いることの有効性や可能性を明らかにする。
		分析の手法	WSの運営・参加によって参加者の意識や相互関係を内側で体験し、また参加者に対するヒアリングも行った。
		分析の論点	「コト」を通しての行政も含めたWSの参加者の意識や相互関係の変化をとらえ、住民意識生成への影響を評価した。
⑩	曾根真紀, 近藤隆二郎 ／市民参加型プログラムとしてのヨシ刈りとヨシ松明祭りに関する研究 ¹¹⁾	研究の目的	市民参加型のヨシ刈り・ヨシ松明祭りのあり方について提案する。
		分析の手法	ヨシの維持管理とヨシ松明祭りにおける参加主体を対象としてヒアリング調査を行った。
		分析の論点	ヨシの維持管理とヨシ松明祭りにおける各主体の活動を比較し、その維持管理方法が専門的知識を有する主体の意見に影響されているか否かを把握した。
⑪	熊澤貴之, 中村芳樹 ／まちづくり合意形成活動を通じた主観評価の変容 ¹²⁾	研究の目的	WS形式の合意形成活動による参加者の主観評価の変容を明らかにする。
		分析の手法	参加者が記入した、考えられる方策に関する評価シートをもとに分析を行った。
		分析の論点	考えられる方策の効用値とその判断の確信度を主観評価とした。

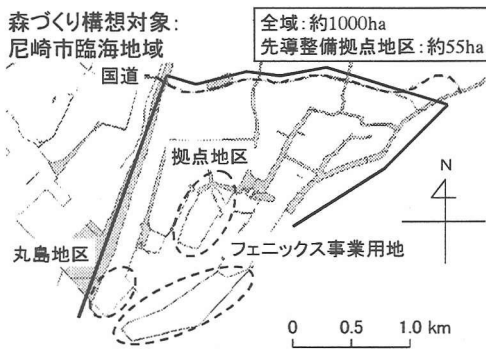


図-3 森構想の対象地域

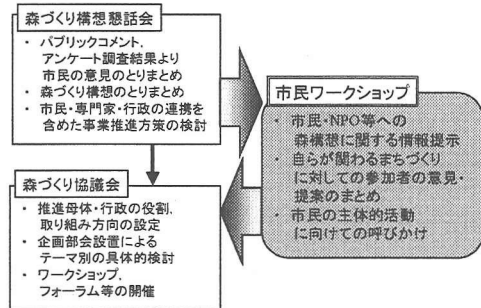


図-4 森構想における市民WSの位置付け

表-2 市民WSのプログラム運営内容

回・テーマ	開催日	参加者人数	主要プログラム	プログラムの特徴
第1回 ～現地を知る～	2002/8/4	28人	現地調査	海上の移動や管段立ち入ることのできない場所の見学など、新しい体験を提供した。
第2回 ～森づくりのイメージをもつ～	2002/8/25	22人	イメージマップづくり 講演	地図上で意見を共有することで、空間イメージと認識を関連させた。 森づくりについての科学的・技術的な基本の解説の役割を果たした。
第3回 ～森づくりについて考える～	2002/9/8	19人	森構想への提案のまとめ	参加者が自由に議論して包括的な提案をまとめた。

3. 尼崎 21 世紀の森構想と市民ワークショップ

(1) 尼崎 21 世紀の森構想の概要

兵庫県尼崎市の南部臨海地域を対象として（図-3），河川や運河，湾内の豊富な水環境を活用して水と豊かな自然環境を積極的に創出し，人と自然が共生する新しい都市によみがえらせる「自然（水と緑）と人が共生する環境創造のまちづくり」が尼崎 21 世紀の森構想懇話会によって構想された。自然と人が共生する舞台として，また都市を特色づけるシンボルとして「森」を大胆に取り入れ，まちづくりのテーマを「森と水と人が共生する環境創造のまち」とすることを基本方針としている。

臨海地域を「森と水と人が共生する環境創造のまち」に変わるためのまちづくりの展開方向として，「①環境の回復・創造，美しい風景の創出」により「②活力ある都市の再生」を図るとともに，再生方向は産業面においては「③既存産業の育成・高度化と新産業の創造」であり，生活面においては「④豊かな人間性を育み，エコライフスタイルを創造するまちづくり」である。また，その推進は「⑤全ての主体の参画と協働による交流型のまちづくり」が基本方針として設定されている。

(2) 森構想における市民ワークショップ

市民 WS は森構想の趣旨に賛同し，市民の立場から森構想の実現に向けた環境回復の活動を展開することを目指している。森構想の策定に関わってきた懇話会の市民委員や学識経験者のほか，市民有志が市民 WS 運営グループを結成し，NPO 法人と連携を行いこの WS を企画している。市民 WS の森構想における位置付けを図-4 に，市民 WS の活動内容を表-2 に示す。

4. アンケートのテキスト分析の方法

(1) 自由記述式アンケートの実施内容

3 回の市民 WS において毎回終了直前に自由記述式アンケートを行った。質問項目は毎回多少の差異はあるもののほぼ共通の質問である。質問文はおおよそ以下のようなものであり，回答状況を表-3 に示す。

1. 今回参加するまでの臨海地域の印象・イメージを教えてください。
2. 今回新しく発見したこと・知ったこと・感じたことは何ですか？
3. ワークショップ運営についてのご意見をお聞かせください。
4. その他、ご意見・ご感想をお聞かせください。

(2) テキスト項目の定義

自由記述式アンケートの分析に関する二例の先行研究においては，回答を単語単位で分割しそれらを各視点において分類・集計を行っている。

本研究では，回答そのままの意見・思いを重視する立

表3 ふりかえりシートの回答状況

回答者属性	対象回答者	第1回	第2回	第3回
地元市民	5	4	2	3
教育関係者	4	4	1	2
市民活動経験者	4	4	2	2
環境保全活動経験者	7	7	5	4
行政・コンサル関係者	2	2	2	2
その他の回答者	4	3	0	1
回答者合計	26	24	12	14
参加者合計		28	22	19
回答率		85.7%	54.5%	73.7%

単位:人(回答率を除いて)

場から、回答を文脈からの意味が無くならない句・文単位で分割を行う。例えば、「とても広く、有意義な利用をすることができるのではないかな。自然（海の生き物）を生かし、残したいものです。」という回答文があった場合、「とても広い／有意義な利用をすることができる／自然（海の生き物）を生かし、残したい」のように3つの項目に分割する。

この方法で回答から抽出した項目を WS の性質と市民 WS の位置付けに合わせて定義した（表-4）。表-4 中の項目例は回答項目で類似性のあるものをまとめ適切な表題をつけて、各項目の定義に当てはめたものである。

- ①「学習」→森構想に関する情報提示：
『森構想・対象地域に関する学習』（以下、「地域の学習」）
- ②「合意形成」→参加者の意見・提案のまとめ：
『グループでの意見交流による合意形成』（以下、「合意形成」）
- ③「参画」→市民の主体的活動に向けての呼びかけ：
『これからの市民の主体的活動に対する認識』（以下、「市民の主体的活動」）

項目分類の「森構想・対象地域に関する学習による悪印象」、「グループでの意見交流による合意形成への不満感」、「これからの市民の主体的活動に対する不安」の項目分類に当てはまるものはマイナスポイントとして集計する。

表-3 のように回答者を地元市民、教育関係者、市民活動経験者、環境保全活動経験者、行政・コンサル関係者、その他の回答者の6つのグループに分類した。行政関係者とコンサル関係者を同じグループにしたのは、この市民 WS の後に行われた協議会 WS の運営にとも関わっていたためである。各回答者グループの第1回、第2回、第3回の回答テキスト総数、各項目数を集計し、その時系列変化を見ることによって分析す

表-4 テキスト項目の定義

地域の学習	
森構想・対象地域に関する学習による好印象（以下、地域の学習の好印象）	森構想・対象地域に関する学習による悪印象（以下、地域の学習の悪印象）
自然が存在する	汚染されている
地域が広い	遊休地が多い
現地見学が良かった	工場地帯
講演が良かった	自然が少ない
その他（地域の特徴）	人がいない
その他（人の活動）	公営
	アクセスが悪い
	その他
合意形成	
グループでの意見交流による合意形成への満足感（以下、合意形成の満足感）	グループでの意見交流による合意形成への不満感（以下、合意形成の不満感）
いろんな意見を聞くことができた	意見が出にくい
感謝の言葉	議論の内容に不満
良いWSであった	WSをまとめるのは難しい
WSに満足している	準備不足
うまい進行であった	WSの成果を活かす方法が必要
その他	まだわからないことが多い
	その他
市民の主体的活動	
これからの市民の主体的活動に対する意欲（以下、活動への意欲）	これからの市民の主体的活動に対する不安（以下、活動への不安）
市民の参加が重要	計画が不透明
継続していくべきである	森のイメージに統一感がない
これからも参加したい	行政との連携が難しい
企業等との交流が重要	事務局が大変である
行政等への発信	今回で引こうと思う
もっと勉強したい	
子供の参加を考えたい	
具体的な提案をしたい	
参加者が費用負担するほうが良い	
その他	

る。ここで、各回答者グループにおける各回の回答者は共通であるとは限らない。対象回答者のうちの誰であるとは特定していない。また、参加者数、あるいは回答者数の総数が少ないため、統計的手法による信頼性の高い分析はできない。本研究では今回の市民 WS の効果として表れた結果を明らかにすることとする。

5. 分析結果

(1) 回答テキスト数に関する分析結果

まず最初に回答されたテキスト数について分析するが、参加者属性別グループは対象とする人数も各回の回答人数も異なる。そこで、各回、各グループ別一人当たりの回答テキスト数の時系列変化を見た（図-5）。

各回を通して環境保全活動経験者の回答テキスト数が多い。このような WS の経験があったのか、アンケートに対しても丁寧に回答している人が多かった。それに対して、行政・コンサル関係者は回答テキスト数が減少していった。同じように経験があったとしても、

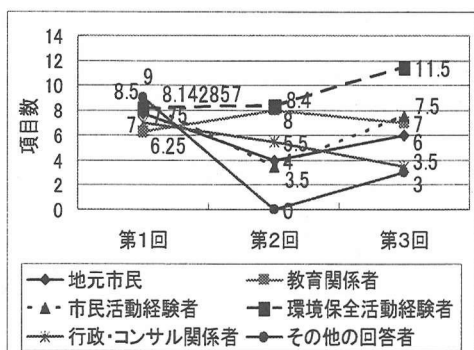


図-5 参加者属性別一人当たりの回答テキスト数

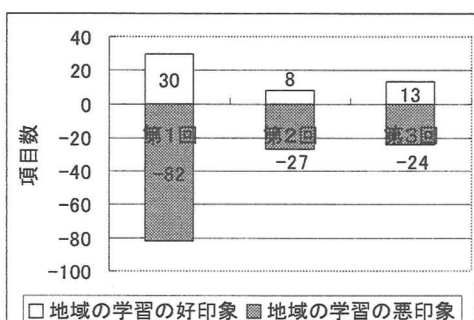


図-6 回答者全体の地域の学習についての分析

WS の内容の方に強い関心があったために、回答に表れなかったと思われる。

(2) 回答者全体の分析結果

回答者全体での集計結果を図-6、図-7、図-8 に示す。

まず、第1回の地域の学習の項目が非常に多い。第1回の現地調査によって、実際の臨海地域の現状を目の当たりにし印象が強かったことを表している。合意形成の項目は満足感の項目が明確に増加しているとは言えないが、不満感の項目が回を重ねるごとに減少している。第1回では今回のWSの意義について不満を抱いている参加者も見られたが、活動を通して今回のWSに理解を示してくれたことを表している。市民の主体的活動の項目は意欲の項目が第3回に増加した。WSの経験をふまえてこれからの活動に意欲を見せている。

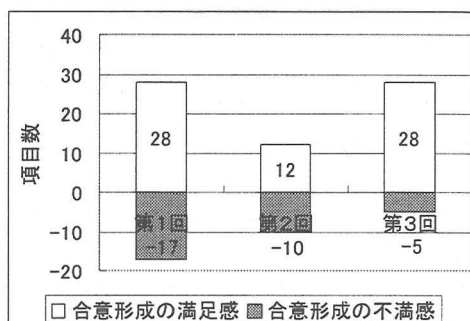


図-7 回答者全体の合意形成についての分析

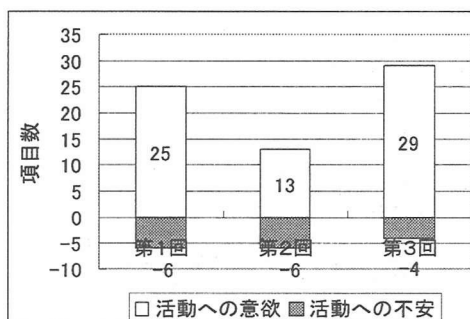


図-8 回答者全体の市民の主体的活動についての分析

(3) 各主体別の分析結果

a) 地元市民

- ・ 地域の認識は海の汚染や閑散としたイメージなどの悪印象が減少し、生物存在の意外性などの好印象が出されている。
- ・ 合意形成の不満感の項目も減少している。提案をまとめる話し合いで意識が高まっていることが分かる。
- ・ 第1回では3回のWSで期待されているものができるのか不安が表明されたが、「効率よく進められこれだけで終わるのはもったいない」との意見が出された。
- ・ 同様に、森構想に対しても計画の全体が見えず何ができるのか不安であったが、今回まとめたものを含めてもっと広く市民に知ってもらおうべきとの意見が出された。
- ・ 地元市民としての参加意欲の高まりも見られた。

b) 教育関係者

- ・ 対象地域の広大さや災害対策への関心など地域の学習の項目が第1回に多く、臨海地域の現地調査による影響が顕著に表れている。

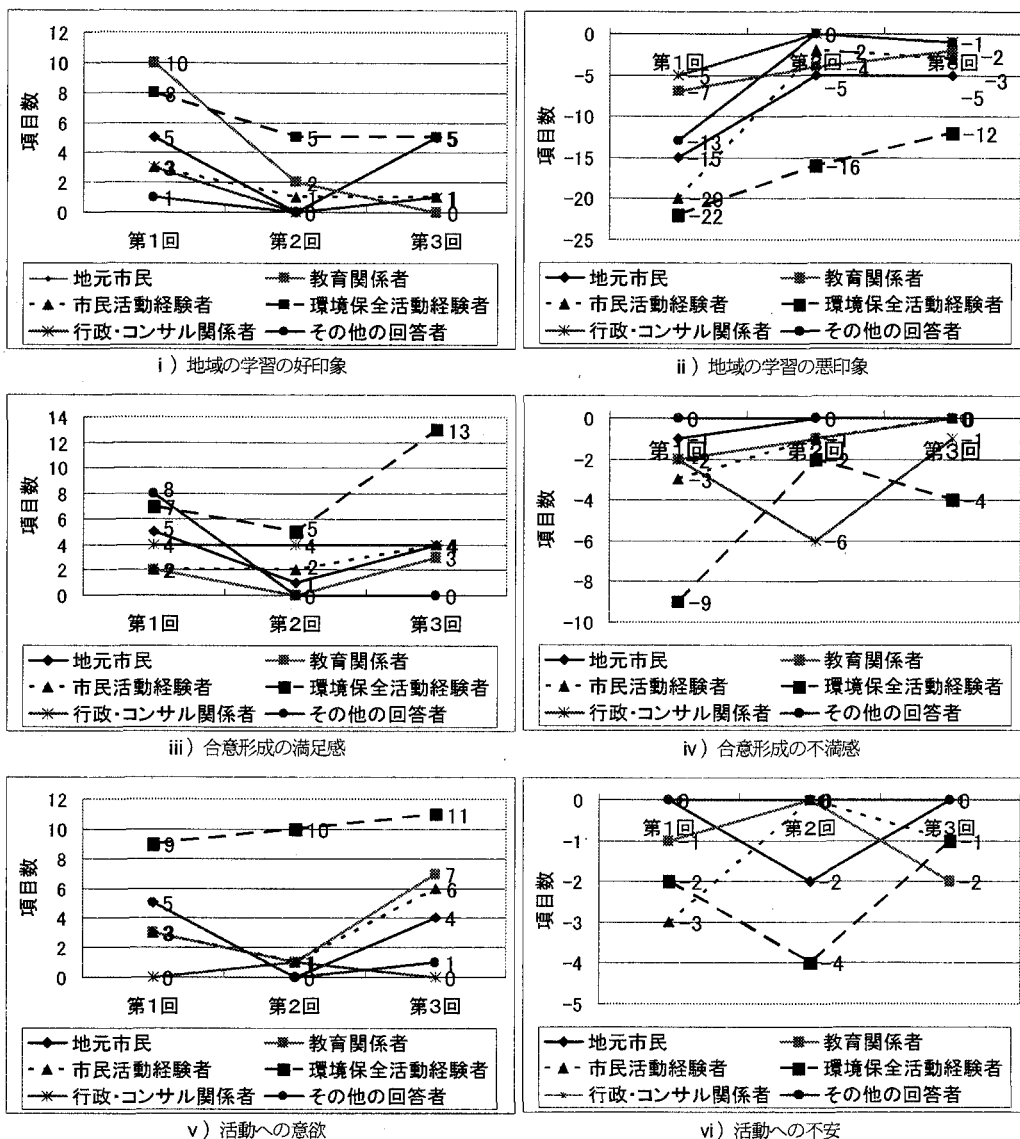


図-9 参加者属性別の分析結果

- 合意形成の不満感が減少し、参加者の多様性の意義に理解を示している。
 - 活動への意欲の項目が増加していて、地域の学習を十分に消化した後、実地の植林体験など小学生との活動を模索しており、行政との強調にも前向きな変化が見られる。
- c) 市民活動経験者
- 活動の経験から知識も豊富で、かつての地域の魅力を語る意見が見られる。
 - 現地調査もふまえて最初は地域の悪印象が多かったが、確実に減少しており地域イメージ改善の効果が表れている。
 - 第1回には WS の意義・方向性や森構想のイメージの曖昧さを批判する意見が出されていたが、合意形成の満足感が増加しており、WS の活動に理解を示すようになったことがわかる。
 - 参加者の多様性とそれにとまとうまとめの難しさを指摘する反面、活動継続の要望と具体的提案に

つながる段階へステップアップすることを望んでいる。

d) 環境保全活動経験者

- これまでの活動の経験からか大気・海の汚染や緑の不足など地域の学習の悪印象が多い。その反面、生態系、特に海の生物が存在することを実感するなど職業柄も表れており、現地調査を高く評価している。
- WS 運営に対する関心が非常に高く、多様な参加者の意見の交流の重要性を認識した上で、継続的活動の要望が出されている。
- 市民、行政、企業の連携を非常に重要視しており、市民への情報発信や行政への具体的提案など意欲的な意見が出された。

e) 行政・コンサル関係者

- 県、市の関係者やコンサルタント側にとって、今回の市民 WS は森づくり協議会が主催する協議会 WS の前段ということもあり、運営の詳細な点についての指摘、感想が多く出された。
- 地域の認識についても行政側らしい視点を持ち、人があまり利用していないという今までの認識と実際に釣りなどで利用している人がいることのギャップを強く感じていた。
- 森づくりについての講演の後、植物についての学習意欲を見ている。

f) その他の回答者

- 環境創生への取り組みがなされていることを実感しながらも、地域の学習としては殺風景、海の汚染、工場地帯など悪印象が強い。
- 他地域からの参加者なので環境問題やまちづくりに関心が高く、WS の場やその中で多様な意見が交換されることの重要性への理解はしっかりと得られている。
- 継続的取り組みにつなげるための事務局の設置の必要性を指摘するなど、市民としてのこれからの活動への参加意識も高いことが見受けられる。

6. 考察

兵庫県による尼崎 21 世紀の森構想が進む過程において、工業地帯の自然再生という重い課題の前に、市民や環境団体も単独では活動や提言しにくいことが懸念されたため、市民のワークショップの準備会や学習会を定期的に開催し、市民が集い森づくりに関する情報交流できる場を提供し、市民が主催するワークショップの企画と運営の支援をこころみた。兵庫県が事務局となっている「尼崎 21 世紀の森づくり協議会」の

表-5 市民 WS 以降の活動への影響

	地域社会のキャパシティビルディングの展開	市民主体の地域組織力の向上	構想に対する認知理解の進展と拡大
市民ワークショップ ↓	参加型 WS の企画運営ノウハウの確保	NPO, 学校教育など地域グループとの連携	参加者の所属組織を通じての情報伝達
森づくり協議会の企画組織の形成 ↓	森づくり, まちづくり, 産業づくり	テーマ別のワーキンググループの形成	情報発信のチャンネルの計画
協議会によるワークショップの開催 ↓	WS に参加して創造的な合意形成に取り組む人材の増加	ワークショップを通じての森づくり活動の参加者の確保	近隣居住者, 産業セクターなどこれまで関心を持たなかった層への情報伝達
市民対象のフォーラムの開催 ↓	市民参加の検討情報のフィードバック	地域での参加型の情報発信イベント運営能力	市民の広い層への情報発信
市民サポーター制度の実施 ↓	企画, 行動の幅広いフェーズに参加する市民の登録	森づくり, まちづくり, 産業の部会の発展的形成	

市民委員公募に 30 名余りの応募があり、パートナーシップ組織の協議会が 2002 年 8 月に設置されて、市民ワークショップや森構想のフォーラムが開催された。最近の活動としては、協議会のワークショップの参加者に呼びかけさらに積極的に森構想に関わる市民を構想的参加者として登録する「森づくりサポーター登録」が 2003 年 7 月から開始された。

これは、市民ワークショップで生まれた、地域のキャパシティビルディングと地域の組織力の向上、さらに、構想に対する市民の理解の発展と拡大の貢献を見ることができる。市民ワークショップ以降に展開された市民参加活動への寄与を表 5 に整理した。

ワークショップの当初は、道筋が決定している計画の進行の中で市民の意見を反映させるのか、ほとんど白紙の状態から市民の意見を中心として計画を創り上げていくのか、運営の意図が不透明であると参加者から不満が出された。今回のような市民参加活動は、計画をまとめるために市民から意見を聞くことが中心で

はなく、行政あるいは計画主体や活動運営者、他の参加者との交流の中で、市民が主体的に参加し計画を実現していく、自ら動いてつくり上げていくことを促すことが目的の主たる部分である。それを参加主体間での情報共有と意思疎通によって盛り上げていかなければならない。その目的をふまえた市民参加活動のデザインと実践を今後の課題として挙げる。

謝辞：本研究は WWF 日興グリーンインベスターズ基金助成事業「都市再生における森づくり計画とその参加のデザイン」（事業責任者：盛岡 通，事業期間：2001 年 10 月～2002 年 9 月）の一部として行われた。ワークショップの運営に当たっては兵庫県 21 世紀の森構想担当各位、および尼崎市臨海担当者をはじめとする行政担当者各位に一方ならぬお世話になりましたここにここに厚く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 盛岡通，藤田壮，佐々木暁一，南詠子：環境ワークショップにおける参加主体意識とデザインに関する調査研究，環境システム研究，Vol.25，pp.175-181，1997
- 2) 澤田俊明，森下善博，山中英生，久米将夫：屋外生活空間整備におけるワークショップ手法の適用性に関する一分析－徳島市末広公園のワークショップ事例を題材にして－，環境システム研究，Vol.24，pp.210-221，1996
- 3) 金俊豪，藤本信義，三橋伸夫：山村集落のアイデンティティ形成におけるワークショップの影響に関する考察－栃木県栗山村の事例－，都市計画論文集，Vol.31，pp.151-156，1996
- 4) 盛岡，藤田ら（1997）前掲
- 5) 森野美德，西岡誠治：住民参加のまちづくりの効果的な展開に関する考察－「安全・安心まちづくり女性フォーラム」における実施を例に－，都市計画論文集，Vol.34，pp.301-306，1999
- 6) 内田奈芳美，真野洋介，志村英明，佐藤滋：目標空間イメージの共有を目指した連続ワークショップの手法に関する研究，都市計画論文集，Vol.34，pp.601-606，1999
- 7) 清野聡子，宇多高明，花田一之，五味久昭，石川仁憲，太田慶生：住民合意に基づいた海岸事業の進め方に関する研究－青森県大畑町木野部海岸の事例－，環境システム研究論文集，Vol.28，pp.183-194，2000
- 8) 坂野容子，饒庭伸，佐藤滋：既成市街地のまちづくりにおいて住民参加ワークショップの果たす役割に関する一考察－ワークショップの展開と個人の意識変化を分析する方法論について－，都市計画論文集，Vol.35，pp.13-18，2000
- 9) 錦澤滋雄，米野史健，原科幸彦：まちづくりワークショップの合意形成機能に関する研究－鎌倉市都市計画マスタープラン策定過程に着目して－，都市計画論文集，Vol.35，pp.841-846，2000
- 10) 村田義郎，延藤安弘：参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察－ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定（柳井市）を事例として－，都市計画論文集，Vol.35，pp.865-870，2000
- 11) 曾根真紀，近藤隆二郎：市民参加型プログラムとしてのヨシ刈りとヨシ松明祭りに関する研究－生態学者と生産業者の意見に注目して－，環境システム研究論文集，Vol.30，pp.183-189，2002
- 12) 熊澤貴之，中村芳樹：まちづくり合意形成活動を通じた主観評価の変容，都市計画論文集，Vol.37，pp.649-654，2002
- 13) 脇田祥尚，黒谷靖雄，田中隆一：参加のまちづくりの学習プログラムに関する研究－松江まちづくり塾を事例として－，都市計画論文集，Vol.37，pp.871-876，2002
- 14) 盛岡，藤田ら（1997）前掲
- 15) 佐々木暁一：意識成長を考慮した環境ワークショップのデザインに関する研究，大阪大学大学院工学研究科修士論文，1997
- 16) 盛岡，藤田ら（1997）前掲
- 17) 辻新六，有馬昌宏：アンケート調査の方法－実践ノウハウとパソコン支援－，朝倉書店，1987

THE ANALYSIS ABOUT THE EFFECT ON PARTICIPANTS BY THE CITIZEN WORKSHOP IN RE-FORESTATION PLAN

Youhei ISHIHARA, Tohru MORIOKA, Tsuyoshi FUJITA and Youko IMAHORI

In recent years, workshop is the focus of attention as new citizen participation. This study took notice of 'Re-forestation Plan' in A city of the Kansai region, as the example of city planning for environment. And we were intended for the citizen workshop in it. Being based on past studies and literatures about workshop, 'Learning about the Area', 'Consensus Building' and 'Independent-minded Activity by citizen' were proved by the analysis of the questionnaire, which were sent out in the citizen workshop. The result comparing with the citizen workshop plan, its success was proved. The subject after this is to keep the balance of citizen's will and the process of the governmental plan.